

コンソーシアム構成団体名 北海道医療大学

取組名 北海道内特別支援学校への障がい者の生涯学習に関するヒアリング調査

・取組の趣旨・目的

高等教育機関が生涯学習の提供モデルを検討するための基礎資料とするため、卒業後における生涯学習の機会として求めるものについて、特別支援学校へヒアリング調査を行い、学校教育の視点からみた生涯学習に関するニーズについて明らかにすることを目的とした。

・実施体制や連携先等

実施体制：近藤尚也、志水幸、白石淳（北海道医療大学看護福祉学部/北海道医療大学先端研究推進センター）
 連携先：北海道教育庁社会教育課による調査依頼協力

・取組の内容・方法

北海道内の高等支援学校及び特別支援学校高等部計7校について進路指導担当教員を中心に半構造化面接によるヒアリング調査を行った。調査期間は2021年10月1日～2021年12月10日、調査項目としては学校の特色、卒業生の主な進路、生涯学習の内容について、必要なサポートや工夫、学習の連続性について、生涯学習における課題、ニーズ（本人、保護者）、情報提供のあり方についてなどであった。これらについて、その内容から質的に項目の整理を行い分析した。

取組の成果と課題

<成果> 学校教育の視点からみたニーズについて3項目に整理できた。

- 1, 生涯学習に求めること・・・慣れ親しんだ場所での開催、送迎、少ない費用負担、活動内容（就労との運動、金銭管理、人間関係、健康管理、運動など）、いつでも参加できる状況、社会参加の場（仲間とつながる場）としての役割 など
- 2, 学校教育との運動・・・学校で活用した教材や学びの構成・身につけたスキルをいかした活動、運動機会の継続 など
- 3, 情報のあり方・・・有効な情報が本人に届くこと、在学時から継続できるための情報、参加きっかけとなる情報提供 など

<課題>

- ・情報提供の場や活動資源の不足・地域差（学校も情報が少ない）
- ・障がいの状況や進路（一般就労か福祉サービスか）によって情報を得られる機会の違い（一般就労だと情報を受け取る機会が少ない）
- ・学校教育では意図的に運動の場を設定している学校が多いが卒業後はなくなってしまう、学びの継続がなくなることで学校での学びを忘れてしまう、仲間とのつながりが希薄になってしまうといった学びの連続性のあり方
- ・学校在籍時から生涯学習活動そのものへの関心をどのように醸成していくのか（慣れ親しむ土台）

コンソーシアム構成団体名 北海道教育大学

取組名 みんなの遊び場 in ふじのめ2021

- ・〇目的：・特別なニーズのある児童・生徒に対する休日の余暇支援活動として、様々な運動遊びを経験できる場を提供する

（学校の教育課程の一環ではなく、社会教育活動として実施、活動保険に加入）

- ・学生が臨床活動を行うことができる場を提供する

○日時：令和3年10月31日（日）午前の部（小学生）：10:00～15:00

○場所：北海道教育大学附属札幌小・中学校特別支援学級（ふじのめ学級）体育館

○参加者：北海道教育大学附属札幌小・中学校特別支援学級の児童及び生徒とそのきょうだい

（例年は一般募集をしているが、本年度はコロナとして対策として対象を限定して実施）

○内容：車椅子体験：競技用車椅子での移動体験、鬼ごっこやボール等を用いた遊びや自由遊び

取組の成果と課題

<成果>

午前の部（小学生とその兄弟）18名、午後の部（中学生とその兄弟）18名、学生等のスタッフ21名が参加し、各種の身体を使った遊びや活動を行った。アンケートの回答には、「コロナ期間があって全然大学生と遊べなかったから楽しかった」「もっと遊べるものを増やしてほしい」などの回答や、保護者の回答には、「全身を使い、普段できる機会のない遊びをしていた」や、「家にいるとテレビゲームやDVDといった遊びになるので、体を動かして遊べる場は良いと思った」といったなどの記述が見られた。

<課題>

「慣れない環境で中々遊べなかったため、そのための工夫があればもっと良いと思った。」「体育館が狭く物が多い」などの回答があった。参加した児童・生徒がより多くの時間、安全に遊びに参加できるように、臨床経験が豊富なスタッフの確保やさらなる環境整備の工夫が必要である。



北海道社会福祉協議会

取組名 地域共生社会推進研究協議会

・取組の趣旨・目的

「地域共生社会」の実現と包括的支援体制構築に向けた考え方、実践を福祉関係者に啓発する

・実施体制や連携先等

北海道社会福祉協議会主催

・取組の内容

上記の趣旨を普及させるための市町村社協、行政、自立相談支援機関、社協以外の社会福祉法人向けのセミナー

<内容> 基調講演、基調説明、実践報告、グループ討議

取組の成果と課題

<成果>

市町村社協等の福祉関係者には地域共生社会の考え方と実践例を啓発する良い機会となっている。

<課題>

福祉関係者以外の幅広い住民層にまで啓発する取組みにはなっていない。

特別支援学校等における障害のある児童生徒を対象とした生涯学習の意欲向上に資する取組

学校名 北海道真駒内養護学校（札幌市）

事業名

高等部における生涯学習につなげる取組

趣旨・目的

- ・卒業後の生活を意識し、継続した学びにつながるよう、個々の教育的ニーズに応じた活動を通して、生徒一人一人が自ら学ぶ力を育てる。
- ・日頃の学習の成果を発揮する場面をより多く設定することで、主体的に考え意欲的に活動する態度を身に付ける。
- ・地域及び関係機関等と共に活動することで、地域の一員としての意識や、様々な人と協力して物事に取り組む力を育む。

取組内容

○障がい者スポーツの推進

- ・体育の授業を中心に、ボッチャ、フロアカーリング、ボウリングを3年サイクルで取り組む（昨年度はボッチャ、今年度はフロアカーリングなど）。
- ・学習の成果を発揮する場として、それぞれの大会を実施する。
- ・オリジナルルールではなく、あえて公式ルールに則って各大会を実施することで、卒業後の学びの拡大や継続につなげる。

○フラワースマイル作戦

- ・地域の方々に来ていただき、花の扱い方、苗の植え方や育て方などを教えていただく。
- ・地域の方々と協力して、校舎横の川沿いの一角に花壇を設置し、一緒に花を植える活動を行う。

成果と課題

○成果

- ・生徒の身近な活動に取り組むことで、生徒の主体性や達成感の向上につながった。
- ・地域の方々と関わることで、地域への関心や協働への意識が向上した。
- ・地域の方々へのお礼や作業製品の配付など、活動後の双方向的なやりとりにつながった。

○課題

- ・新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、内容や実施方法等の変更を余儀なくされた。また、直接的な活動が制限され、地域への関心の向上など期待された成果を達成することが難しかった。

学校の概要など

本校は昭和36年に開校した北海道で初めての肢体不自由特別支援学校です。
 小学部、中学部、高等部があり、132名の児童生徒が在籍しています（令和4年2月1日現在）。
 令和3年度に開校60周年を迎えました。



本校ホームページ



高等部体育大会（フロアカーリング）



フラワースマイル作戦

特別支援学校等における障害のある児童生徒を対象とした生涯学習の意欲向上に資する取組

学校名 北海道札幌あいの里高等支援学校（所在地：札幌市）

事業名

「Go for your dream.」夢のために、ベストを尽くす～生徒の主体性と個性を磨く部活動

趣旨・目的

- 【校訓】「未来」～これまでの自分を振り返り、これからの未来を創造する。「チャレンジ」～過去の経験を踏まえ、目標を掲げ進む。「感謝」～他者の好意に感謝できる。他者の役に立つことを喜びに感じられる。
- 【部活動の目的】(1)学校生活に対する意欲を高める。(2)生徒の放課後の活動を充実する(3)卒業後も積極的に趣味や特技を継続的に楽しむ姿勢を育てる。(4)活動を通して人間関係を深め、社会性を育てる。

取組内容

- 活動時間
毎週火・木曜日 15:20～16:45
- 部活動の種類
バドミントン部、サッカー部、バスケットボール部、卓球部
音楽部、美術部、パソコン部
- 部活動参加生徒数
約90名
- 令和3年度の主な対外的な活動
(1)サッカー部～北海道新篠津高等養護学校との練習試合
(2)バスケットボール部～FIDバスケットボール大会に出場
(3)パソコン部～NPO法人札幌チャレンジドから講師を招いて検定受験に向けた取組（特別支援学校ICT就労促進事業の活用）

成果と課題

- 【成果】
 - ・生徒の余暇活動、趣味を広げ、深めることができる。
 - ・異学年との関わりから交友関係が広がり、豊かな人間関係を築くことができる。
 - ・チャレンジする楽しさや仲間との協働を体感し、個性をさらに磨くことができる。
- 【課題】
 - ・感染症予防対策のため、活動に制限がある。
 - ・コロナ禍の影響のため、対外的な活動（大会など）が減少している。
 - ・職員勤務時間内で部活動を運営しているため、活動時間に制約がある。

学校の概要など

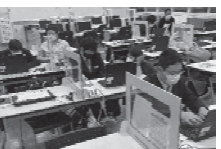
学校教育目標：Go for your dream.『夢のために、ベストを尽くす』
～今の自分を超え、より高みをめざそう～
生徒数：169名（令和4年1月現在）
設置学科：生産技術科、環境・流通サポート科、被服デザイン科、
食品デザイン科、福祉サービス科、普通科
開校年月：平成28年4月



【サッカー部】新篠津高等養護学校との練習試合



【バスケットボール部】FIDバスケットボール大会



【パソコン部】検定練習

特別支援学校等における障害のある児童生徒を対象とした生涯学習の意欲向上に資する取組

学校名 北海道函館高等支援学校（所在地：函館市）

事業名

「地域との連携」2019函館マラソンボランティア活動

趣旨・目的

- ・社会貢献活動と生涯学習の基盤づくり
- ・ ☆学校の想い ○地域でのスポーツ大会の運営に参加～「見る・支える・知る」を経験
- ・ ○卒業後のスポーツライフや生涯学習へつなげてほしい～「する・見る・支える・知る」の始まり

取組内容

- 函館マラソン実行委員会の協力による外部講師授業
(1)大会の特徴や魅力 (2)参加者・コースの特徴
(3)評価→改善→運営（日本一を目指す！）
- 総合的な探究の時間との関連（テーマを生徒が自ら設定）
数学、理科、社会、職業、外国語の教科横断的な取り組み
(1)マラソンコースの歴史や課題 (2)塩分の必要性
(3)人の体のつくりと働き (4)長距離を走るための走法
(5)外国人とのあいさつ、応援や励ます表現
(6)トップランナーのスピードと距離 など
- 大会当日の役割
(1)フル・ハーフ合わせて8000人の参加者への応援
(2)ゴール後のペットボトルや完走タオルの配付

成果と課題

- ◎運営者の大会にかける想いや説明を理解することで、準備段階から本校も運営に参画・協力していることを実感
- ◎自己肯定感の向上、新たな気付き・探究
 - ・水を渡すと「ありがとう」と言われてうれしかった。
 - ・いろんな人がマラソンに参加しているんだなと思った。
 - ・マラソンが、こんなにもきついものなんだと知った。
 - ・すごく疲れたが、とても楽しめた。来年もまたやりたい。
- ◎総合考察（これからの教育目標の実現を目指して）
 - ①カリキュラム・マネジメントの確立と地域資源の活用
 - ②「生活との結び付き」（職業生活や社会生活）
教育活動全体を通じた意味付け・価値付け・重み付け等
 - ③自己の「生き方」に迫る学びを実現する授業改善

学校の概要など

平成31年度（令和元年度）に開校し、知的障がいのある生徒が対象。
学校教育目標は『共生社会の一員として、自ら社会に貢献する人間の育成』とし、普通科、生産技術科、食品デザイン科、福祉デザイン科の4学科から編成されている。
<http://www.hakodatekoushi.hokkaido-c.ed.jp/>



スタート応援

「お疲れ様でした」と声をかけながら配付

事業名

「地域との連携」2021 『花いっぱい道づくりの会』のボランティア活動参加

趣旨・目的

- ・社会貢献活動と地域との協働
 - 地域で長年継続しているボランティア活動への参加
 - 地域住民や地域企業の方、少年団等の子ども達と一緒に活動
- ・生徒が社会の一員であることを自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを考える

取組内容

1. 『花いっぱい道づくりの会』の活動

この会は2004年から函館道路事務所、函館市、財団法人函館市住宅都市施設公社との4者にて道路の緑化・清掃活動を実施している。花かいどうボランティアは平成16年度から18年間続き、地元に着し、今年も国土交通大臣賞を受賞している。

また、2019年には『ベスト・シーニックパイウェイプロジェクト』で最優秀賞を受賞している。

2. 参加した活動（教職員、生徒会、PTA）

この会は28団体から構成されており、本校は今年度から加入団体として登録

(1)春から秋にかけては国道沿いの花壇整備（計5回）

(2)冬はワックスキャンドルを作り、「シーニックdeナイト」を開催

成果と課題

◎学校全体で取り組む新しい取り組み

残念ながら函館マラソンが2年連続中止になり、計画していた地域と協働する活動については足りない部分があった。この活動を始めることで本校が地域との関わりを深め、生徒が卒業後の社会貢献活動を知り、考えていくきっかけとなる。

◎次年度以降にむけて

今年度は参加できる部分から実施したので、活動全体の内容や意義が生徒に充分伝わっていない面があった。次年度は年度初めから『花いっぱい道づくりの会』と連携し、計画的に活動を進めていく。1年を通して活動し、地域の方との交流を深めながら生徒会主体の働きかけやPTA活動との協働を増やしていきたいと考えている。

学校の概要など

平成31年度（令和元年度）に開校し、知的障がいのある生徒が対象。学校教育目標は『共生社会の一員として、自ら社会に貢献する人間の育成』とし、普通科、生産技術科、食品デザイン科、福祉デザイン科の4学科から編成されている。

<http://www.hakodatekoushi.hokkaido-c.ed.jp/>



除草などの花壇整備

初めてのワックスキャンドル製作

文部科学省委託事業 地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築
令和3年度全道図書館専門研修〈経営(関係法規)〉開催要項

1 趣 旨

2019年6月に読書バリアフリー法（視聴覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律）が成立しました。障害の有無にかかわらず、すべての人が読書による文字・活字文化の恩恵を受けられるようにするための法律です。この法律を出発点に、どんな人も利用しやすい図書館づくりのために役立つことを学びます。

2 テーマ

「誰もが読書できる図書館を目指して」

3 主 催

北海道図書館振興協議会、北海道立図書館

4 共 催

北海道教育委員会

5 日 時

令和4年（2022年）1月14日（金） 10時30分から15時50分まで

6 会 場

北海道立図書館 1階研修室（江別市文京台東町41番地 TEL：011-386-8521）
※JR大麻駅南口から徒歩約8分

7 対象者

道内公立図書館（公民館図書室）職員、市町村教育委員会職員、学校図書館の運営等に携わる方

8 定 員

25名（定員を超えた場合は、調整することがあります。）

9 内 容

「日程」のとおり

文部科学省委託事業 地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築
令和3年度全道図書館専門研修〈経営(関係法規)〉

「誰もが読書できる図書館を目指して」

<日 程>

時 間	内 容
10:00～10:30	受 付
10:30～10:40	開 会
10:40～12:00	<p>講 義</p> <p>①「第6期 北海道障がい福祉計画について」 講師：北海道保健福祉部 障がい者保健福祉課社会参加係 係長 長多 将嗣 氏</p> <p>②「障がいのある方への生涯学習支援」 講師：留萌教育局 教育支援課 社会教育指導班主査 高橋 枝里子 氏</p> <p>読書バリアフリーの推進を含めた「第6期 北海道障がい福祉計画」の全体像を知り、これらの施策によって北海道が目指す社会のかたちを共有します。また、障がい者の生涯学習支援について広く学びます。</p>
12:00～13:00	昼休み
13:00～14:00	<p>事例紹介 「点字図書館の仕事について」 講師：札幌市視聴覚障がい者情報センター 遠藤 宏明 氏 (札幌市保健福祉局障がい保健福祉部)</p> <p>ボランティアグループとの連携により点字資料、録音資料などの多様な資料を必要な方に届ける、視聴覚障がい者情報センター点字図書館の仕事を通して図書館に出来ることを学びます。</p>
14:00～14:10	休 憩
14:10～15:10	<p>事例紹介 「図書館利用に障害のある人々へのサービス」 講師：日本図書館協会 障害者サービス委員会委員 椎原 綾子 氏 目黒区立八雲中央図書館主任</p> <p>図書館と図書館資料を利用するとき存在するさまざまな障壁を認識し、障がい者サービスへの理解を深め、地域のすべての人にサービスを届ける図書館の役割について改めて考えます。</p>
15:10～15:40	館内設備見学ツアー
15:40～15:50	閉 会

令和3年度全道図書館専門研修〈経営（関係法規）〉報告

1 日 時 令和4年1月14日（金）10:30～15:50

2 会 場 道立図書館 1階研修室

3 参加者 20名

※当初の参加予定人数31名中、コロナウイルス感染症対策および悪天候によるキャンセル 11名

4 日 程 別添開催要項のとおり

5 概 要

講義①「第6期 北海道障がい福祉計画について」

保健福祉部障がい者保健福祉課社会参加係 係長 長多 将嗣 様

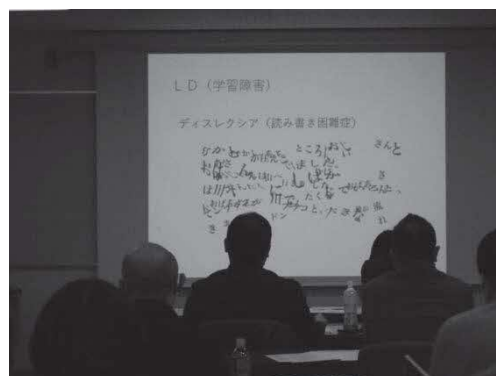
第6期北海道障がい福祉計画についての概要、現状など特に読書バリアフリーに関係ある部分を重点的にご説明いただいた。今回の研修の目的を明確にし、参加者と共有することが出来、研修の導入として参考になる講義であった。

講義②「障がいのある方への生涯学習支援」

留萌教育局教育支援課社会教育指導班 主査 高橋 枝里子 様

障がい者の生涯学習支援について、関係法令が整備されてきた過程や北海道の現在の状況などの基本的な情報の提供、実践事例の紹介などに始まり、さらには具体的に障がい者の生涯学習を支援するにあたって、どのような障がいを持っているとどんなことが苦手な場合があるのかについても解説があった。

講師ご自身の経験を交えたエピソードも多数紹介され、図書館利用をするにあたって何が問題になり、職員の対応ではどのようなことが求められるのか、参加者にも実際に図書館（室）での対応が必要な場面がイメージがしやすい講義となった。



事例紹介「点字図書館の仕事について」

札幌市視聴覚障がい者情報センター 遠藤 宏明 様

点字図書館について、設立の経緯や点字図書館がどのような施設であるのかといった基本的なところから、さらに実際の業務内容、読書バリアフリー法対応への課題まで広くご紹介いただいた。

多数のボランティアに多くの協力を得ている状況であるが、ボランティアの高齢化による担い手の確保に関する課題や、コロナ禍でなかなかボランティアの活動や新規ボランティアへの研修ができずにいる現状についても言及があった。

事例紹介のあと参加者から点字図書館の業務や資料について具体的な質問が多くあがり、関心の高さがうかがえた。

事例紹介「図書館利用に障害のある人々へのサービス」

日本図書館協会障がい者サービス委員会委員（目黒区立八雲中央図書館主任） 椎原 綾子 様

障がい者サービスとは何であるのか、何のために行うのかという定義と目的を明確にすることをスタートに、障がい者サービスの対象や制度・法律について説明いただいたのち、DAISY 資料や LL ブック等の個別の資料がどのようなもので、どのような使い方があるのかについても現物や関連 Web サイトを紹介しながら解説いただいた。

資料の提供方法、また図書館がどのように資料を使いたいけど使えないでいる人のニーズを掘り起こし、リーチするのかといった PR 方法に対するアドバイスなど、実際の図書館業務における障がい者サービスのあり方について具体的な方法が提案され、それぞれの図書館・図書室における業務の参考になる事例紹介となった。



ブックトラック上段：椎原さんの事例紹介の中で言及された資料（当館所蔵）
中・下段：当館「バリアフリー資料セット」の一部

館内設備見学ツアー

道立図書館総務企画部企画支援課 主任 木村 啓

20 分程度で館内のスロープ、車いす昇降機等の設備、またカウンターに用意しているコミュニケーションボードや拡大読書機などのハンディキャップ対応ツールを利用者の動線に沿って見ていくツアーを行った。

自館の設備の参考にするため、写真撮影を行う参加者もいた。

※交通機関のため不参加：1 名

6 アンケート結果

- ・別添のとおり回答を得、内容については概ね好評であった。〔回収率 100%〕
- ・研修当日がたいへんな悪天候であったことから、冬季の研修は避ける、もしくはオンライン開催を希望する声が多かった。

7 その他

- ・研修当日までにコロナウィルス感染症対策、悪天候によるキャンセルで 11 名のキャンセルが出たため、当日配布資料を個別に送付することとした。

障害者の生涯学習推進コンソーシアム形成事業
地域連携コンソーシアム会議 構成員名簿

氏名	所属・職名
土島 智幸	医療法人稲生会 理事長
宮崎 隆志	北海道大学 教授
志水 幸	北海道医療大学 教授
今野 邦彦	藤女子大学 准教授
安井 友康	北海道教育大学札幌校 教授
杉澤 洋輝	いっしょにね！文化祭実行委員会 事務局長
大原 裕介	社会福祉法人 ゆうゆう 理事長
野村 宏之	社会福祉法人 北海道社会福祉協議会 副局長
紺野 順子	D P I 北海道ブロック会議 理事
吉田 智樹	北広島市教育委員会 社会教育課長
山田 努	岩見沢市健康福祉部 主幹
近藤 正臣	北海道真駒内養護学校 副校長
松岡 志穂	北海道札幌あいの里高等支援学校 教頭
仙北谷 逸生	北海道教育庁学校教育局特別教育支援課 課長補佐
相馬 知人	北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課 主幹
山田 智章	北海道立生涯学習推進センター 主幹
太田越 雄三	(株) ディスティネーション十勝

事務局：北海道教育庁社会教育課